
優しさの狂氣

キイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しさの狂氣

【Zコード】

N4987Z

【作者名】

キイナ

【あらすじ】

『口癖』『微妙』な主人公

俺の『死』が×××の不幸せと言つた。気付かなかつたのに、気付いてやれずに×××を傷付けていた。

謝罪。気付けば謝つていた。

×××は慌てふためき固定してきました。

ありがとうございます。

だが、幸せは続かない。身をもつて知つていたから。

穿つ銃弾は×××を捉え、刃は俺を貫く。

お互に伸ばした手は虚しへも一いつの武器によつて妨げられた。

クソ……クソ……。

「おい、幸多。何してんだ？」

「その両の眼で見てるでしょうが。説明が必要？」

「必須だ、何故ならそれを俺は質問してるんだからな」

「ただ昼休みという時間に身を任せて静寂に綽綽と同調してるだけ。答えの採点を願おうかな？」

「はあ……あのな、普通にほーっとしてるって言えないか不幸多」

中学生生活一年目。そんなあだ名で呼ばれる様になつたのは一年生半ばの秋だったりつか。

強弱明快に認識出来ない根性をひん曲げた性格の影響か、腑抜けた容姿に普通過ぎる黒髪。あ、最後のは部活の影響だったかな。微妙だ。

柔道部所属一年木崎健兎。^{あやさきけんと}机の木に流れる川の想像の産物を実現した様な木目の数を黙認している最中に声を掛けてきた人物。

同じ黒髪を所々固めた微妙に男女の人気を得る、表裏の達人。といふのも、木崎とは幼少からの仲だから嫌でもコイツの事は認識しているつもりだ。

俺の力むという行為を忘れた容貌に相対し、木崎は常に温厚な微笑を浮かべ話す。それは誰彼構わず同一のモノで崩れる事を知らない。

あ、でも^{いわさき}助ける時は揉めた……けな?

「おい、明日テストが在んだろう? 今まで勉強勉強で懲り懲りだつたからさ、今日格ゲー行かないか?」

余裕綽々で、辺りを気にせずその口調を変えてくる木崎に感心の一瞥を差し上げた後、木目と遊戯。

先程から微妙に眠気が加算し、木崎からの期待度高めの御誘いの言葉が堪忍袋をつついている。

「お掛けになりました会話は現在、弾みそうに在りません。ピー、と発信音が聞き取れましたら踵を返して微妙にショックを受けてください……ピー」

木目の数が丁度、二十を超えた時。

ドコツ!!

「ひや、ざわやー。」

机へ伏せる為に両腕を頭部前の保護具として置いていたため必然的に手薄となる脇腹を木崎が殴つてきやがつた。

面を上げて、木崎を目視する。

「な、何だあ！？いきなり？！」

「行くか行かないか、聞いてんだ不幸野郎！？」

「行くか！？テストですよ、この先に行き着く道に後悔しないよう蓄積するためのテスト！？んな日にゲーセンなんて行けるか、小動物が！？」

「小動物？ はあ？！お前馬鹿か、人間誰でも心は小動物と同等だ！お前みたいに自分を過大評価なんてしてねえんだよ！？不幸多郎が」

「ああ、上等だ！？今日は負けね！？ボロクソだ、小動物！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987z/>

優しさの狂気

2011年12月16日22時47分発行